

### 結ぶ食景 : 農家住宅と棚架けの技法による 再編計画

KOIZUMI, Kazuhisa / 小泉, 和久

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院デザイン工学研究科

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of graduate studies. Art and Technology / 法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2023-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030199>

# 結ぶ食景

## — 農家住宅と棚架けの技法による再編計画 —

Scenery of connected food  
— Reorganization plan utilizing traditional farming techniques —

小泉和久

Kazuhisa KOIZUMI

主査 赤松佳珠子

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

The plan is to learn from the traditional techniques of grape farmers in Yamanashi Prefecture and reorganize farmhouses. Using the cultivation method of grapes to connect various elements. Visualize the historical time axis, the behavior of each activity, the cycle of life, and the connection of each element. A new landscape will be created by creating a modern space that has been learned from historical techniques.

**Key Words** : traditional techniques, Yamanashi,

### 1. 背景・目的

山梨県甲州市葡萄棚が広がる景観である。ここの塩山地域に100年以上続く農家住宅が存在する。

専業農家、兼業農家、週末農家と代を迫うごとに農との距離が生じ、周りを見渡せば維持管理の難しさや資金の問題から畑が駐車場やアパートに置き換わりつつある。それでも、土と共にある暮らしは豊かで、美味しく、制度に翻弄され失われるべきものではないと感じるのである。

ロードサイドのファスト風土的景観と農家集落的景観がグラデーショナルに混ざりあう状況は、無数の「家族」たちが代々直面してきたアセットマネジメントの、個々の選択の結果が集積したものである。とすれば、住まいとはそれだけで社会的な存在なのではないだろうか。

### 2-1. 葡萄棚の仕組み

ブドウはつる性植物であるがゆえに、収穫を目的とした栽培には支柱が不可欠である。そのことがブドウ畑を視覚的に独特なものにしてきたともいえる。特に、日本のブドウ栽培は現在まで一貫して棚栽培が主流であることが特徴とされている。

棚栽培が広がった要因は定かではないが、日本のブドウ栽培では、高い湿度に適した風通しのよい栽培手法が求められたこと、生食を目的としたブドウ栽培からはじまったため、栽培には多くの手をかけることが必要であり、棚のほうが作業をしやすかったことなどが考えられる。

### 2-2. 葡萄棚の歴史

葡萄の起源は古代エジプトの時代から確認することができる。その当時は葡萄は発酵させて祝祭の際に飲むことを目的とし栽培されていたことが考えられる。

次に江戸時代。当時は趣味や商業のために葡萄棚が甲州街道を基に広まったことが確認できる。

そして近代。葡萄棚は住民の生活や生業とともにそばにあったことが見て取れる。

このように葡萄は棚架構とともに、人々の生活に構造とともに寄り添ってきたと考えらる。家から庭や畑、道路、そしてまちへと連続する環境全体としての問題としてとらえ、農業の技術を中心に据える視座から思考を展開していく。



古代エジプトの祝祭



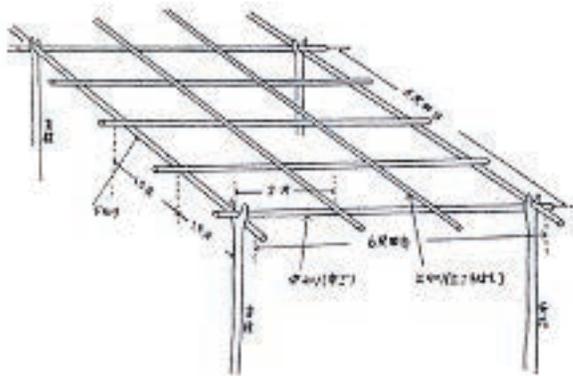
江戸の富岳三十六景図



近代の棚田の暮らし

### 2-3. 葡萄棚の架構法

竹を用いた棚架けは大正時代頃まで続き、そうしたブドウ畑の景観を撮影した古写真も多く残されている。しかし、竹材による棚架けはひび割れなどの劣化速度が速く、部分的であるにせよ毎年の交換が求められるという最大の欠点が存在した。こうした問題を克服すべく、竹材を四分丸（1.3cm）あるいは六分丸（1.9cm）の太さの鉄棒で代替することを試みた。現在でも払い下げられた木製の電信柱を棚の中心に据える柱としている畑を現在でもみることもできる。現在の勝沼地域では棚の柱材はコンクリート製がほとんどであるが、ネズミサシ、クリ材などが使われていた時期もあった。



### 2-4. 葡萄棚とは民藝的作法である

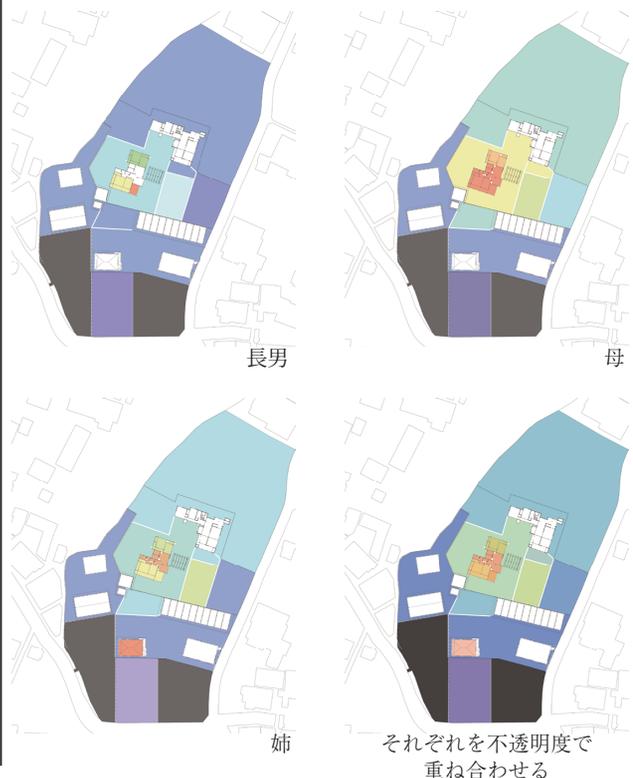
これらのことから葡萄棚は民藝的に作られていると推測する。ここで柳宗悦が定義した民藝品の条件8つを挙げると、葡萄棚はこれら条件に当てはまり、さらには、これに加えて時間軸をも持ちうる持続性が加えることができると考えられる。

- 柳宗悦が定義した「民藝品」の条件に下記の8つ
- 実用性：観賞のためではなく、実用性を備えていること
- 無銘性：無名の職人によってつくられたものであること、  
名をあげるための仕事でないこと
- 複数性：民衆の需要に応じるため、  
数多くつくられたものであること
- 廉価性：民衆が日用品として購入できる、  
安価なものであること
- 地方性：色、かたち、模様など  
土地の暮らしに根ざした地域性があること
- 分業性：量産を可能にするため熟練者による  
共同作業でつくられていること
- 伝統性：先人が培ってきた技術や知識の蓄積に  
のっとっていること
- 他力性：個人の力よりも気候風土や伝統などの  
他力に支えられていること

### 3-1. 現住人に対し聞き取り調査

現住宅敷地の模型を作り、住人に対して模型を用いながら現在の空間の関係性に着目する。加えて昔ら現在までの変遷、時代ごとの空間の活用の仕方の聞き取り調査を行った。

現在の空間の使い方をとらえる方法として、敷地図に対して色温度を用いて、空間の所有認識の領域を可視化することを行う。それを不透明度で重ね合わせ、統計的に敷地の領域をとらえなおす。



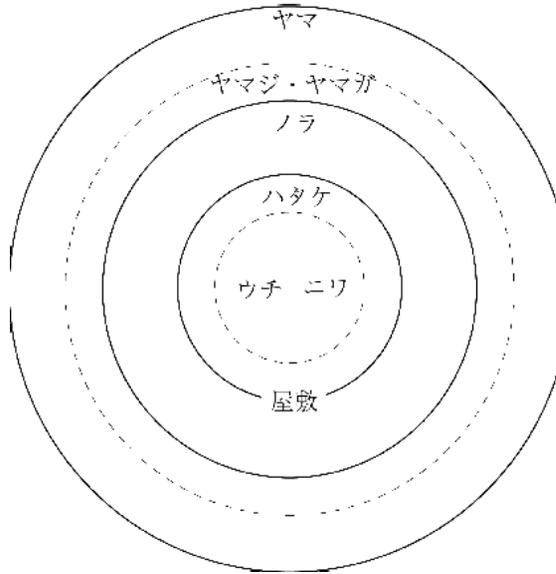
領域図より現在の住宅の使われ方は中心性が強いことがわかる。これは特別なことではなく、この地域の屋敷作りが影響していると考えられる。

屋敷という言葉で土地の人が理解する範囲はウチと呼ぶ住居とニワ。そしてこれに続くハタケである。

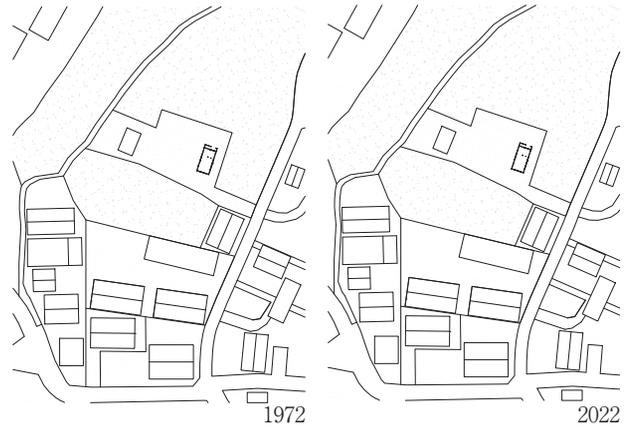
ノラは田やハタケの領域。これらが集落内を示す領域であり、集落空間の外側の山に連なる傾斜地をヤマジと呼び、ヤマへと繋がる。

人の空間認識をウチとソトに分けて考えると、幾重ものウチとソトの境界の重なりとなる。その中で住居の次のウチとなる屋敷は他の屋敷との接点であり、また生活や生業の様子を色濃く示す領域である。

当時の屋敷の作り方が現在にまでも影響していると考えられる。



対象敷地の農家住宅は曾祖父が東京から移住をし、始まった。明治から昭和にかけて増改築を繰り返しながら常に葡萄園を残す方向で生き長らえてきた。明治時代に建てられた平家長屋は、その後も明治から大正、昭和と時代が流れる中で、住居棟や作業棟、倉庫などを増減築を繰り返し、現在に至る。



#### 4-1. 結 - 新たな軸を生み出し葡萄棚で関係性を紡ぐ -

今まで横軸で完結していた同線に新たに縦軸の活動の軸を組み込む。また中心性が強い住宅の機能性を食、寝、風呂を分配してそれらを葡萄棚でつなぐように設計を行っていく。

縦軸を生み出し、それを既存の葡萄棚の高さに合わせて水平線に架けることで、稲作の歴史を持つ棚田の地形は、南側から徐々に棚架けの天井高までの高さが低くなり、葡萄への距離が近くなる。距離が近くなったと体験したとき、葡萄が加工された三次産業のワイナリーへと到達する。発酵とはかつては神を祭るために樽が共に立てられるという歴史がある。ワイナリーとともにある樽を登り南側を振り返ると、通ってきた葡萄棚の水平線と、富士山を拝むという体験を生み出す。

